

# 那珂92

—那珂遺跡群第190次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1508集

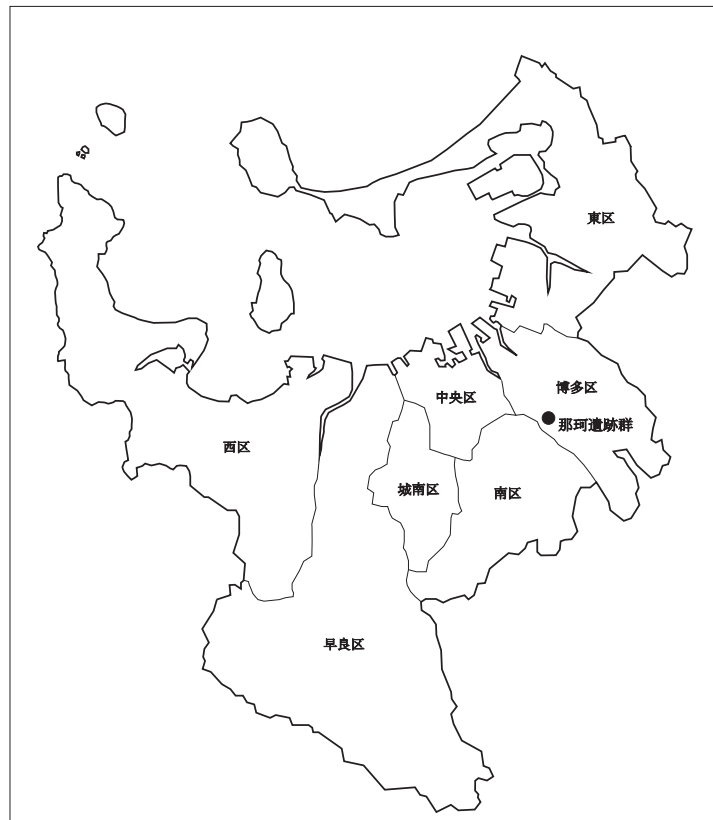
2024

福岡市教育委員会

# 那珂 92

—那珂遺跡群第190次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1508集



調査番号 2140

調査略号 NAK-190

2024

福岡市教育委員会



# 序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は市立那珂中学校仮設校舎建設工事に伴う那珂遺跡群第190次調査について報告するものです。調査では飛鳥時代の溝などが確認され、特殊な土地利用の一端を明らかにすることができました。

本書が文化財保護へのご理解とご協力を得られる一助となるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、関係各位には発掘調査から本書の刊行に至るまでご理解とご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

令和6年3月22日

福岡市教育委員会  
教育長 石橋 正信

# 例言

1. 本書は博多区那珂2丁目地内の市立那珂中学校仮設校舎建設に伴い実施した那珂遺跡群第190次調査の報告書である。
2. 発掘調査は民間受託、整理・報告書作成は令達事業として実施した。
3. 本書に使用した国土座標値は、すべて世界測地系（第Ⅱ座標系）による。
4. 本書に使用した方位は、すべて座標北である。
5. 本文中に使用した遺構略号とその性格は、以下の通りである。  
SC：竪穴建物 SD：溝 SK：土坑 SX：落ち込み
6. 本書に掲載した遺物の番号は通し番号とした。
7. 本書に使用した遺構実測は常松幹雄、鶴来航介が作成した。
8. 本書に掲載した挿図の作成、製図、写真撮影、執筆は鶴来がおこなった。
9. 本書に係わる記録類、遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されるので活用されたい。
10. 本書の編集は、鶴来がおこなった。

遺跡名	那珂遺跡群	調査次数	190次	調査略号	NAK-190
調査番号	2140	分布地図図幅	板付	遺跡登録番号	0085
申請地面積	16,688 m <sup>2</sup>	調査対象面積	130.0 m <sup>2</sup>	調査面積	84.0 m <sup>2</sup>
調査期間	令和4(2022)年1月4日～2月8日			事前番号	
調査地	福岡市博多区那珂2丁目18番1号				

# 本文目次

序	
I. はじめに	1
1. 発掘調査に至る経緯	1
2. 発掘調査の組織	1
3. 立地と歴史的環境	1
II. 調査の記録	8
1. 調査の概要	8
2. 竪穴建物(SC)	8
3. 溝(SD)	9
4. 土坑(SK)	17
5. 落ち込み(SX)	18
6. その他の出土遺物	19
III. まとめ	20

# I. はじめに

## 1. 発掘調査に至る経緯

令和3年12月21日付で、福岡市教育委員会施設課長より福岡市博多区那珂2丁目18番1号における那珂中学校仮設校舎設置に伴う埋蔵文化財調査についての依頼通知がなされた。那珂中学校では令和4年度に教室不足となる可能性が高く、2階建ての仮設校舎を設置する必要性が生じた。これを受けて埋蔵文化財課事前審査係は、建設事業対象地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群に含まれており、その南側では120次調査において現地表下50cmで遺構が確認され、今回の工事が遺構面より深い掘削を伴うことから、工事による埋蔵文化財への影響が回避できないと判断した。これを受けて遺構の保全等に関して協議をおこなった結果、建物部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。調査対象としたのは工事で埋蔵文化財に影響が及ぶ130.0㎡である。

その後、令和3年12月24日付で施工業者である大和リース株式会社福岡支社と埋蔵文化財調査業務委託契約を締結し、令和4年1月4日から発掘調査を、令和4・5年度に資料整理および報告書作成をおこなうこととなった。

## 2. 発掘調査の組織

調査委託：大和リース株式会社福岡支社

調査主体：福岡市教育委員会（発掘調査：令和3年度 資料整理：令和4・5年度）

調査総括：文化財活用部埋蔵文化財課

課長 菅波正人

調査第1係長 本田浩二郎

庶務担当：文化財活用部文化財活用課

管理係 井手瑞江（令和3年度）

内藤愛（令和3～5年度）

事前審査：文化財活用部埋蔵文化財課

事前審査係長 田上勇一郎

神崇啓

調査担当：文化財活用部埋蔵文化財課

常松幹雄 鶴来航介

## 3. 立地と歴史的環境

那珂遺跡群の所在する福岡平野は、三方を三郡山系や背振山系からのびる小山塊に囲まれ、北は玄界灘に向かって開口する博多湾に面した沖積平野である。この福岡平野には那珂川と御笠川が北流して博多湾に注ぎ込み、両河川の間には観音山や牛頸から派生して断続的に長くのびる更新世台地が形成されている。春日原丘陵と総称されるこの更新世台地は、花崗岩風化礫層を基盤とし、その上層には阿蘇山の火砕流による八女粘土層と鳥栖ローム層が堆積している。丘陵は奴国王の王墓地とされる須玖岡本遺跡から井尻、五十川を経て那珂、比恵へと続いて博多湾の海岸砂丘に北面しており、それらの丘陵上には後期旧石器時代から中世にかけての遺跡が連綿と複合的に展開している。なかでも弥生時代から古代にかけて、遺構密度が非常に高い。

那珂遺跡群は、この春日原丘陵の北部に位置し、比恵遺跡群と連続して同じ丘陵上に立地しており、その東には御笠川が、西には那珂川が北流しており、丘陵の裾部には両河が削り出した開析谷が幾筋も彎入する。那珂遺跡群は、この南北に長く連なる比恵・那珂遺跡群の南半部に位置し、比恵遺跡群とは浅い鞍部を境として便宜的に呼び分けている。



1. 那珂遺跡群
2. 比恵遺跡群
3. 山王遺跡
4. 東比恵三丁目遺跡
5. 上牟田遺跡
6. 席田平尾遺跡
7. 下月隈D遺跡
8. 雀居遺跡
9. 久保園遺跡
10. 席田大谷遺跡
11. 宝満尾遺跡
12. 東那珂遺跡
13. 那珂君休遺跡
14. 板付遺跡
15. 高畑遺跡
16. 下月隈C遺跡
17. 立花寺遺跡
18. 板付東遺跡
19. 麦野A遺跡
20. 麦野B遺跡
21. 三筑遺跡
22. 笹原遺跡
23. 諸岡B遺跡
24. 諸岡A遺跡
25. 五十川遺跡
26. 井尻A遺跡
27. 井尻B遺跡
28. 井尻C遺跡
29. 横手遺跡
30. 三宅C遺跡
31. 大橋E遺跡
32. 三宅B遺跡
33. 和田A遺跡
34. 和田田蔵池遺跡
35. 三宅遺跡群
36. 大橋A遺跡

図1 遺跡分布図 (S= 1 / 25,000)

この丘陵中央部の尾根線上の最高所には、福岡平野で最古期の前方後円墳である那珂八幡古墳があり、その北西には東光寺剣塚古墳が、また南西部には前方後方墳や円墳群が広がっている。この尾根線を境として丘陵は東西にむかって緩やかに傾斜し、その間には可耕地としての低湿地帯が広がり、裾野には両河川による細長い開析谷が幾筋も彎入している。

比恵・那珂遺跡群はこれまでに計 196 次の調査を重ねており、各時代の集落や墳墓地の様相が次第に判明してきている。遺跡じたいは旧石器時代から人間活動が確認され、ナイフ形石器や彫器、剥片などが出土するものの分布は散漫である。縄文時代には石鏃や石匙、土器などが得られるものの、遺構にともなう事例を欠き、土地利用の具体的な解明には程遠い。この様相は比恵遺跡群でも同様と言える。

弥生時代に入ると、台地の縁辺部を中心に竪穴建物や貯蔵穴群などの遺構が広がり、開析谷に面した緩斜面には土器や石器、木器をともなう包含層が形成される。集落域は尾根上へと次第に拡大する。37 次調査では、台地の南西縁で夜白式期から前期前半の二重環濠が発見された。また中央部の尾根上でも貯蔵穴をともなう環濠集落が営まれ、北西縁のアサヒビール工場内や東縁部にも貯蔵穴群がひろがること確認されている。前期後半から中期になると、集落域は縁辺部から尾根上へと次第に拡大していく。比恵遺跡群も同様に集落域の拡大傾向が見て取れる。

中期後半から後期には台地の広範囲に集落域が拡大していく。なかには銅剣や銅矛など青銅器の鋳造関連遺物もふくまれており、青銅器の生産に携わる工人集団の工房群が台地の尾根上に存在したことがうかがえる。また集落域の周辺には墳丘墓をはじめとする甕棺墓群が造営され、遺跡の性格も多様化する。比恵遺跡群の中央部でおこなわれた 6 次調査では、細形銅剣を副葬する甕棺墓を埋葬した墳丘墓も出現し、遺物も銅製鋤先や鉄斧などの金属器や各種木製農具、建築部材、漆製品など多様な遺物が出土している。

古墳時代になると、台地の中央部に福岡平野で最古の前方後円墳である那珂八幡古墳が造営され、主体部の木棺内に三角縁神獣鏡や玉類が副葬されていた。5 世紀には遺構が顕著に減少して集落の断絶がうかがえるが、6 世紀後半には那珂八幡古墳周辺の台地上に東光寺剣塚古墳と剣塚北古墳の 2 基の前方後円墳のほか前方後方墳が造営される。このうち東光寺剣塚古墳は、全長 140m で三重の周溝をもつ筑前地域で最大級の前方後円墳である。古墳の築造と軌を一にして那珂遺跡群の遺構も増加に転じて集落が広く展開する。規格性の高い 3 本柱の柵列に囲繞された大型建物群が比恵遺跡群の北西部（8・72・109 次調査）や中央部（7・13 次調査）で見つかり、記紀にみえる「那津官家」との関連が注目される。

7 世紀になると大型建物群や初期瓦、これらを囲繞する区画溝など、公的施設の性格を示す遺構群が相次いで形成される。とくに遺跡群の南部では大規模区画が集中しており、比恵遺跡群の様相を継承するかのような消長をみせる。『日本書紀』の記事には「筑紫大宰」が対外的な役割を担ったことが記されており、これらの遺構群と関連付ける見解もある。8 世紀には南からのびる官道が通り、新たに区画溝が掘削されるなど大規模な土地利用が継続する。瓦葺きの建物も点在しており、郡衙との関連も注目される。

中世においても区画溝をともなう居館遺構が確認されており、長期にわたって那珂遺跡群が地域の中心的役割を担ったことがうかがえる。





图2 那珂遺跡群全体図 (S= 1 / 7,500)

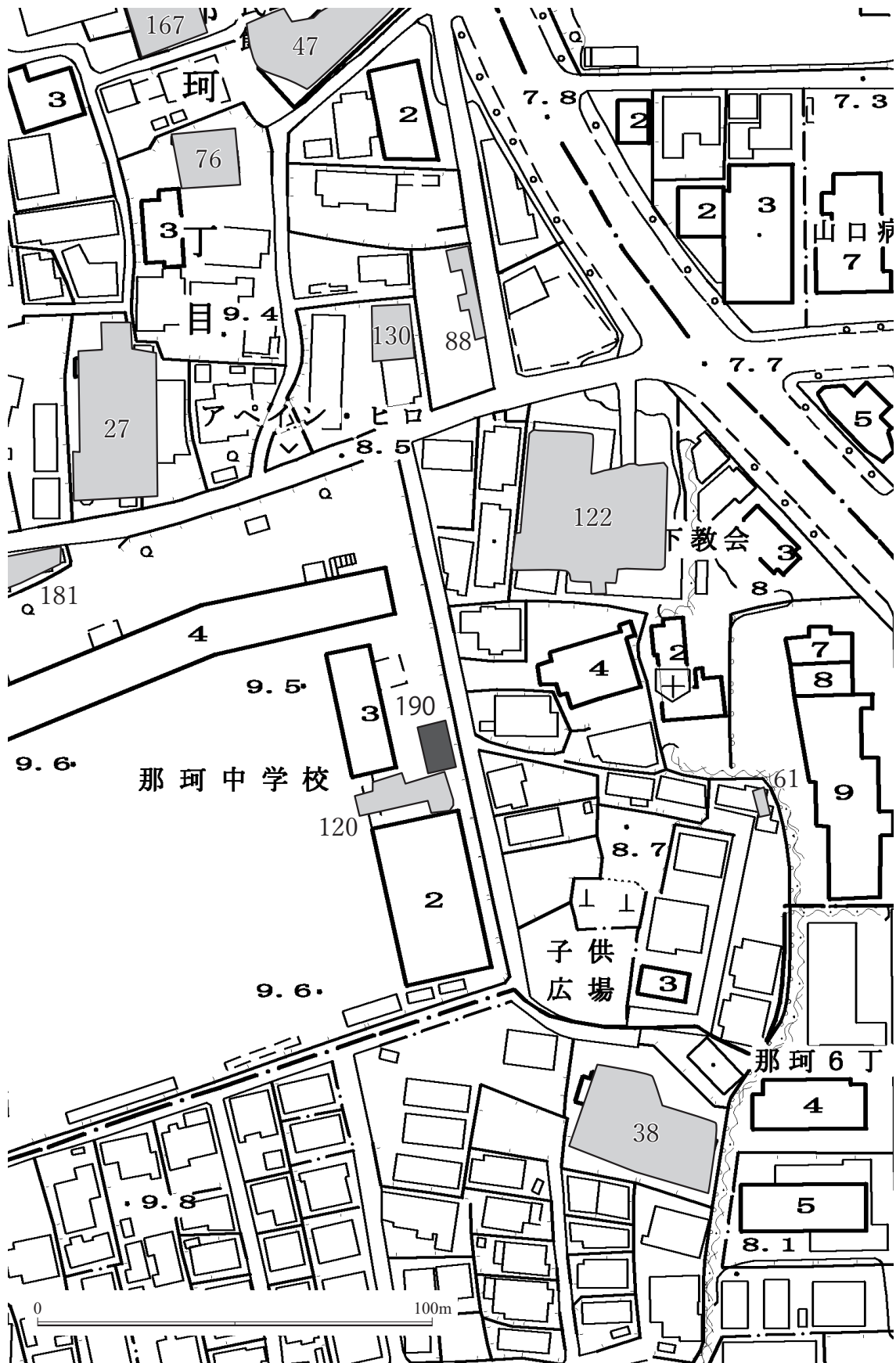


図3 190次調査地点の位置 (S= 1 / 1,500)



図4 調査区位置図 (S= 1 / 200)

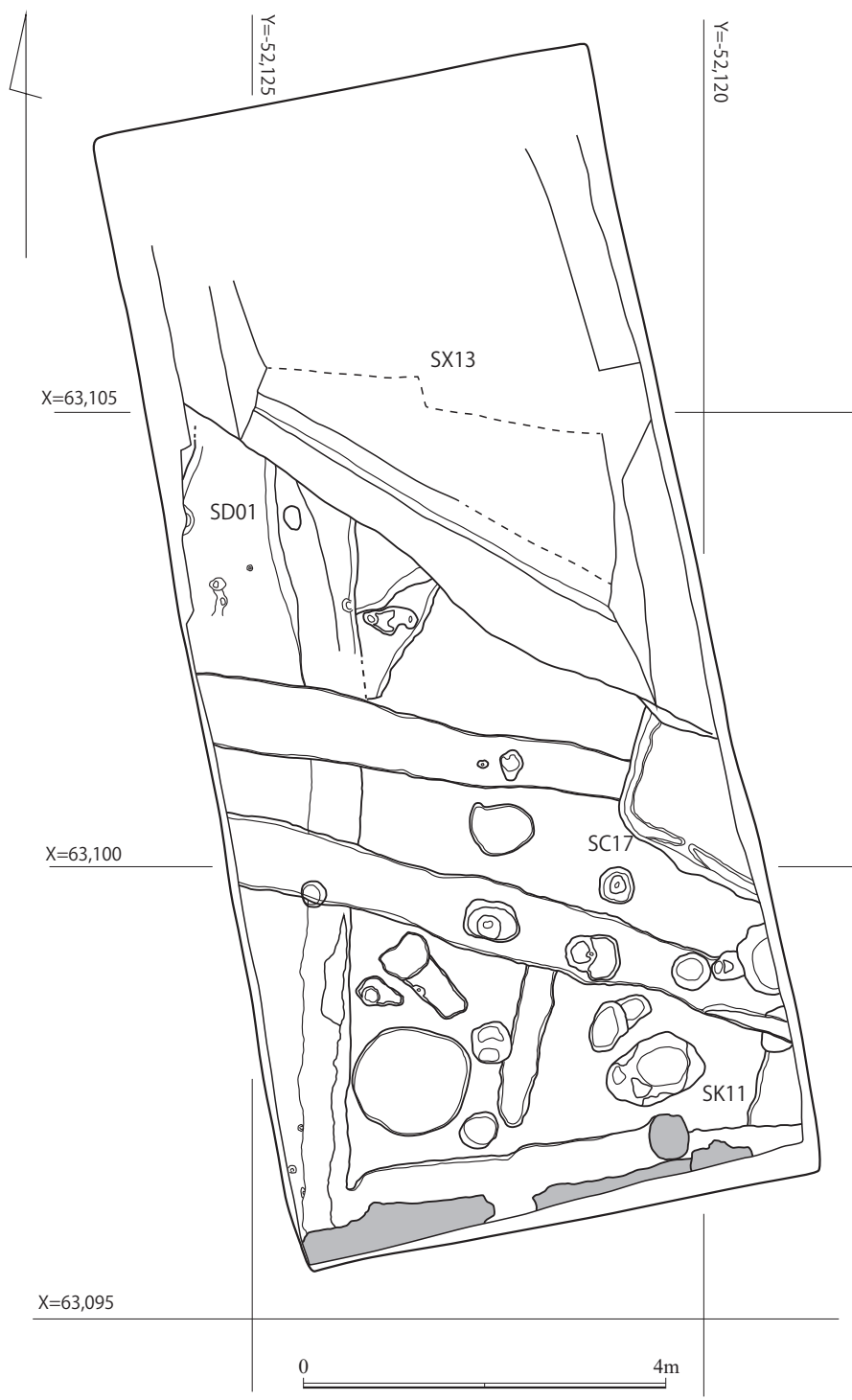


図5 遺構配置図 (S=1/80)

## Ⅱ．調査の記録

### 1．調査の概要

本調査区は那珂遺跡群の南東側縁辺付近に位置する。調査区周辺は西へ200mほどの那珂中央公園付近を頂点とした緩やかな丘陵をなしており、調査区は丘陵東側の緩斜面上にあたる。調査区の現地表面は標高9.6～9.7mである。福岡市立那珂中学校の敷地東端に位置し、120次調査の北側となる。

本調査区では50cmほどの客土を除去すると薄い暗灰黄色の包含層を挟んで鳥栖ローム層に達し、その上面で遺構を検出した。遺構面の標高は8.9mで、調査区の内部では傾斜はみられない。調査区の東側は樹木の根が遺構面に達しており、切除しながらの掘削となった。

調査は1月5日に機材搬入と重機による表土掘削をおこなった。表土を除去すると調査前に設置されていた花壇のコンクリート基礎が埋設されており、これを重機で破砕し調査区の縁辺に集積したことで、場内での排土処理を妨げる恐れが生じた。そのため表土掘削を全体の4分の3程度でいったん中断し、園芸業者に基礎の撤去を依頼したうえで1月13日に残りの範囲を再び重機で掘削した。調査区は2月8日に埋戻し、同日に機材および遺物を搬出して撤収し、委託者に調査地を引き渡して調査を終了した。

今回の調査では120次調査で検出された南北溝の続きをふくめて溝6条、竪穴建物1棟、土坑1基、ピット多数にくわえて近世以降の落ち込みを発見した。遺物はコンテナケース4箱を数える。

### 2．竪穴建物（SC）

調査区東壁際でSC17の1棟を検出した。北側を近世以降の落ち込みに切られ、東側は調査区外となるため、掘削したのは遺構の一部である。今回の調査では南辺1.9m、西辺1.4mの範囲を確認している。主軸方向はN-54°-W。検出面から20cmほど掘り下げたところで床面と思われる硬化面がみつめられ、その下部には5cm程度の貼り床を設けている。埋土はしまりのない黒褐色土の単一層である。壁面に沿って深さ3～5cmの壁溝を確認した。柱穴は未確認である。

遺物は土師器、須恵器、鉄製品が出土した。1、2は土師器の甑である。1は把手と胴部が遺存するが胴部径は不明。把手は先端が上方へ向かってややのびる。2は把手のみ遺存する。把手は比較的短小で先端のつまみ上げは弱く、横断面は扁平である。内面には指頭圧痕が複数みられる。

出土遺物から、7世紀後半と考えられる。

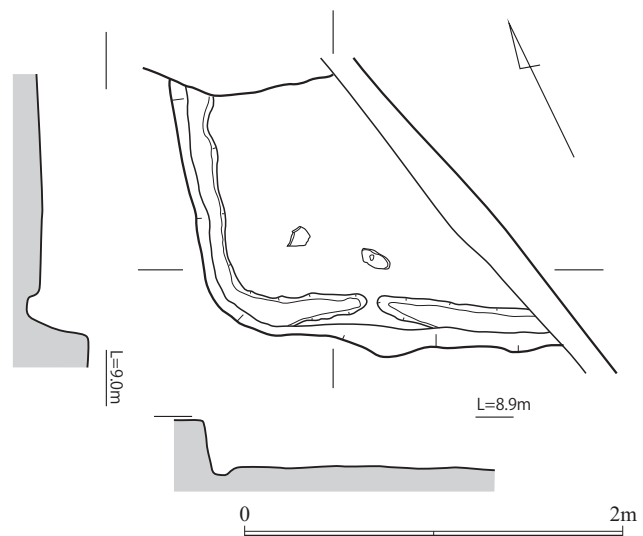


図6 SC17 (1 / 40)

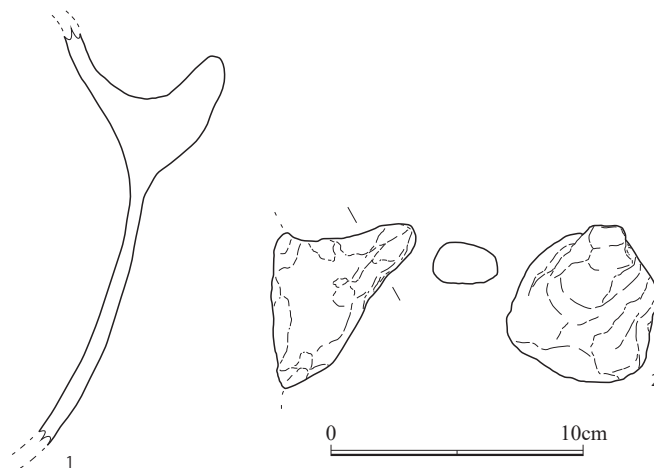


図7 SC17 出土遺物 (S= 1 / 3)

### 3. 溝 (SD)

#### SD10

SD10 は西壁付近で検出した南北方向にのびる直線的な溝である。120 次調査で検出した SD-03 の延長部分にあたり、総計で約 14 m の長さを確認したことになる。北側を近世の落ち込みに切られ、また西側は調査区外となるため断面形状を確定し得ないが、2 か所に設けた土層観察ベルトのうち南ベルトでは逆台形、北ベルトではレンズ状を呈する。このうち北ベルトでは西側の立ち上がりをわずかに捉えており、そこから推定される溝幅は約 3 m で、120 次調査での検出幅よりも広がるとみられる。底面は若干の凹凸を伴うがおおむね平坦といえる。溝は  $N - 3^\circ - E$  とほぼ正方位にまっすぐ掘削される。

遺物は溝全体から出土したが、その分布は均質的ではない。南側では上層から中層にかけて面的な広がりをみせたが、下層ではほとんど遺物が出土しなかった。一方で中央から北側では中層から下層に遺物が多く、部分的に集中する傾向がみられる。こうした点から、遺物は流れ着いて堆積したものではなく、溝の埋没過程で繰り返し投棄された集積と考えられる。なお溝の深度は南北でほぼ変わらず検出面から 50cm ほどである。

出土遺物は土師器、須恵器、カマド、瓦などコンテナ 3 箱程度である。3～10 は土師器の甕である。3 は口径 30.6cm、残存高 11.7cm。口頸部はわずかに外反する。口縁端部には薄くススが吸着する。外面は縦ハケ、内面は横ハケで、内面のほうがハケの目が細かい。胎土は橙色で 1 mm 大の石英をふくむ。4 は口径 28.6cm、頸部径 23.2cm、残存高 6.5cm。口頸部はく字形を呈し、口縁部はまっすぐに外反する。外面は胴部上半を縦ハケ、内面をケズリで調整する。胎土はにぶい橙色で 1 mm 大ほどの石英が混じる。5 は平底の底部のみ遺存し、底部径は 6.4cm、残存高 4.1cm。外面は縦ハケで成形しており、内面は押さえにともなう指頭圧痕が生じ、さらにナデ消している。胎土は橙色で 3 mm 大の石英をふくむ。6 は口縁から胴部下半まで遺存する。口径 17.8cm、頸部径 15.1、胴部径 17.4cm、残存高 16.6cm。胴部の張りはやや弱く、口径と胴部径がほぼ一致する。頸部から口縁部はわずかに外反しながら開く。7 は口縁部から胴部上半までが残り、口径 14.8cm、頸部径 12.7cm、胴部径 18.0cm、残存高 12.0cm。口頸部は短く、その内面は丸みを帯びる。外面は縦ハケ、内面は横ハケ。胎土は橙色で 1 mm 大の長石をまばらにふくむ。8 は口径 19.0cm、頸部径 16.0cm、残存高 6.4cm。頸部から口縁部はわずかに外反しながら開く。9 は口縁部から胴部上半まで遺存する。口

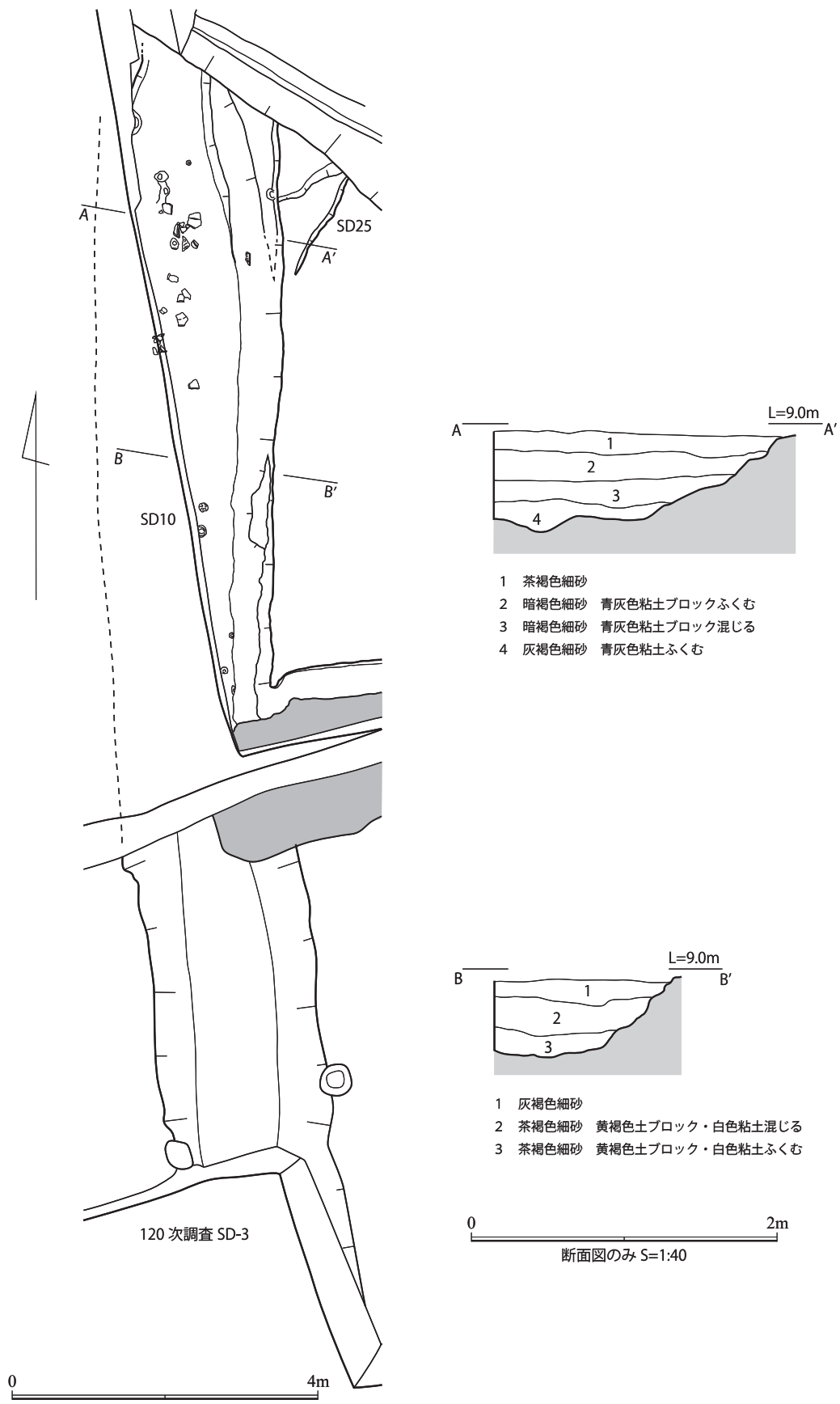


図8 SD10 (S=1/80)

径 17.8cm、頸部径 15.2cm、胴部径 15.5cm、残存高 5.2cm。口縁部が外へ向かって強く開く形態をとる。外面は縦ハケで成形しナデ調整を加える。胎土はにぶい黄橙色で 2～3 mm 大の石英が混じる。10 は口径 17.5cm、頸部径 16.0cm、残存高 3.4cm。口頸部はごく短く、く字形に開く。内外面ともに磨耗がはげしく調整は不明。

11・12 は砥石である。11 は残存長 7.4cm、残存幅 4.7cm、最大厚 1.5cm。各面を欠損するが、厚みから持ち砥と推定される。凝灰岩質で粒度は粗く、粗砥にあたるとみられる。12 は最大長 12.7cm、最大幅 9.2cm、最大厚 5.9cm。凝灰岩を用いる。2 面を使用しており、うち 1 面は中央が丸くくぼんでいる。橙色の顔料が付着する。

13 は鉄釘である。全長 4.9cm、最大径 0.7cm。断面円形で頭部は円盤状に広がる。中央付近でわずかに屈曲している。

14～21 は土師器の甑である。14 は口縁部から把手まで遺存する。口径 26.0cm、残存高 18.5cm。胎土は赤褐色で 2～3 mm 大の石英が混じる。内面に縦ハケがみられる。15～20 は土師器の甑の把手である。18 は把手が比較的短小。把手を体部と接合するためにヘラ状工具で押圧しているため、直線的な刻目が把手の周囲を円環状にめぐる。把手の横断面は扁平。その他は把手が比較的長大で断面が円形に近く、ナデ成形でハケ等工具の使用はみられない。21 は甑の底部。底面が大きく開いており、中央に幅約 3 cm で棒状の軸をわたす。底部径 14.3cm、残存高 7.8cm。胎土は橙色で 1～3 mm 大の石英や長石をふくむ。

22～26 は移動式カマドである。22 は底部で、張り出しの程度から、上部から側部にかけての部位にあたるとみられる。庇の内側にはハケ調整の痕跡がみとめられる。胎土は橙色で 1 mm 大の石英を少量ふくむ。23 は庇の一部で、上部から側部にかけての屈曲部にあたる。庇は端部で 1～1.5cm 程度の厚みがある。胎土は橙色で 1 mm 大の石英をふくむ。24 はカマドの底部である。底面の器幅は 2.0cm で高さ 7.3cm にわたって遺存する。底部は外面を横ハケで調整しており、使用にともないススが吸着する。25 は底部が体部から剥落したものである。胎土はにぶい黄橙色で 5 mm 大の石英をふくむ。26 は庇の側部から屈曲する部位にあたり、残存長は 16.5cm。胎土はにぶい黄橙色を呈し、1 mm 程度の長石をまばらにふくむ。庇の外側は加熱による影響で赤変ないしは黒変している。

27～37 は須恵器の坏である。27・28 は坏蓋、29～37 は坏身。27 は口径 17.0cm、残存高 2.6cm。上半部は欠損するが、全体がドーム状に緩やかに湾曲する形態とみられる。端部内面にはかえりを作り出し、内外面ともにナデ調整をおこなう。胎土はにぶい黄橙色で 1 mm 大の石英をふくみ、焼成はやや不良である。28 は口径 14.6cm、器高 2.2cm。全体が皿状に緩やかに高まり、中央に扁平なつまみを取り付く。外面ナデ調整。胎土は灰白色～浅黄色で少量の雲母や長石をふくむ。29 は口径 11.7cm、残存高 2.6cm。かえりをつまみ上げて上方へ反らすような形態をとる。内外面ともにナデ調整。胎土は灰色で焼成は良好。1 mm 程度の石英をふくむ。30 は口縁部のみ遺存し、最大径 13.0cm、残存高 1.5cm。胎土は灰色で 1 mm 大の石英をふくむ。内外面ともにナデ調整だが、口縁端部にヘラによる調整がみられる。31 は口径 12.0cm、器高 2.6cm。天面がレンズ状にわずかに湾曲しており、そこから口縁部に向かって直線的に開く。屈曲部は成形時の接合部にあたり、その部位がちょうど段状に盛り上がる。天面には「×」とみられるヘラ記号を刻む。口縁部内面にはかえりを貼り付ける。胎土は灰白色で焼成良好であり、0.5mm 程度の白色鉱物をふくむ。32 は口径 13.0cm、残存高 2.9cm。かえりが比較的長大である。内外面ともにナデ調整。胎土は灰色で 0.5mm 未満の白～褐色鉱物をわずかにふくむ。焼成はやや不良である。33 は底部径 8.8cm、残存高 2.9cm。腰がやや張り、高台は外へ向かって踏ん張る。高台を貼り付ける際の調整があまく、接合部には段が生じ



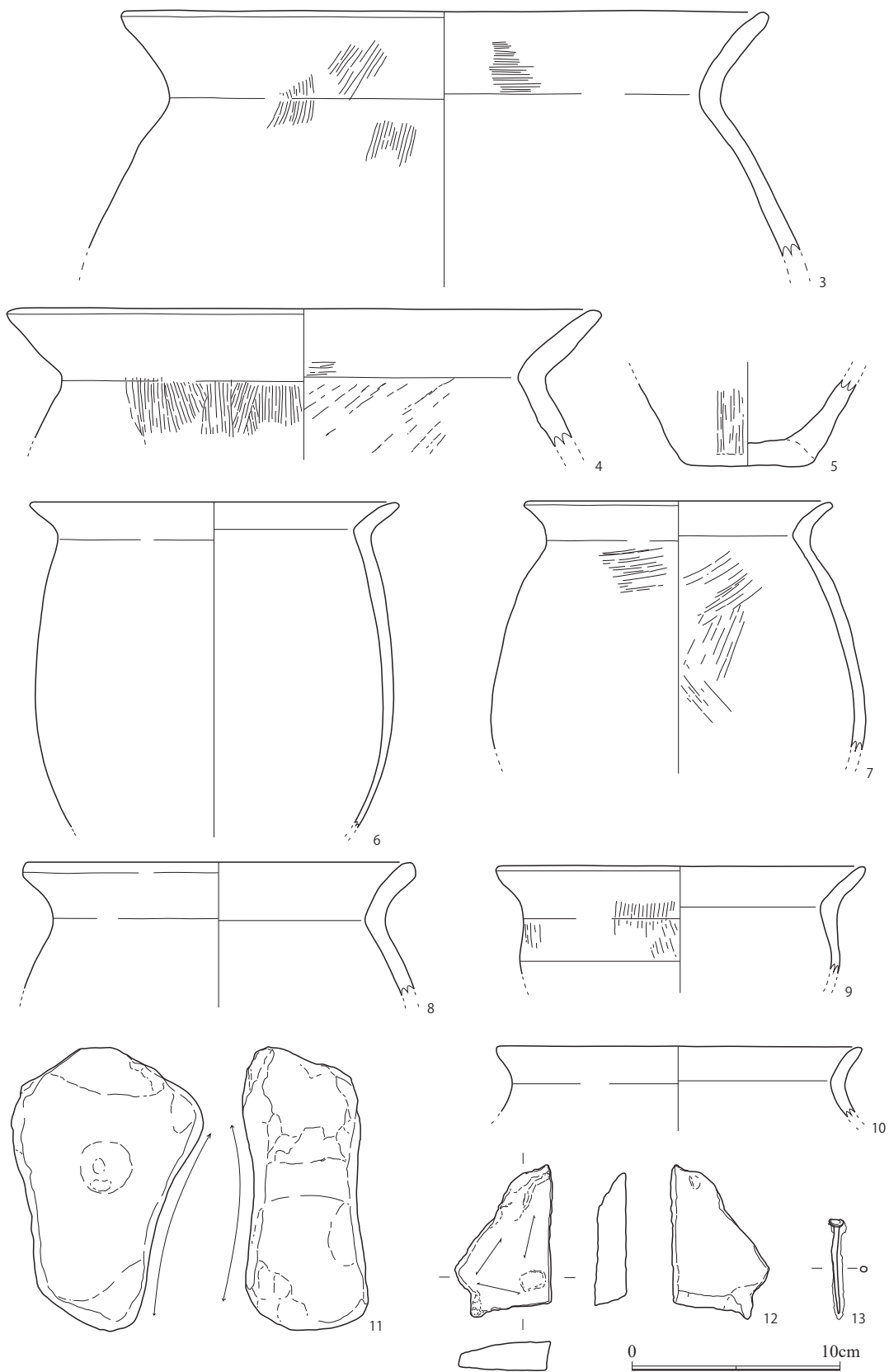


图9 SD10 出土遺物 (S= 1 / 3)

ている。胎土は黄灰色だが焼成不良で全体に軟質であり、とくに底部は白っぽさが残る。内外面ともにナデ調整。34は口径16.3cm、底部径11.2cm、器高4.3cm。高台は外へ向かってやや張る。底部から口縁部にかけて直線的に開き、口縁端部は肥厚しない。焼成は不良で器面には粉がふく。35は底部径8.8cmで高さ3.2cmが遺存する。腰が張り直線的に立ち上がる。高台は低く外へ向かってつまみ出す。胎土は灰白色で雲母を少量ふくむ。焼成はやや不良で表面が粉っぽい。36は底部のみ遺存しており、底部径10.3cm、残存高2.2cm。高台が外へ向かって強く張る。底部内面に多数のケズリ痕がみられる。胎土は灰色で0.5mm程度の白色～褐色鉱物をふくむ。焼成良好。37は底部径10.0cm、残存高3.8cm。高台は低くわずかに外へ張る。高台の内側はヘラ成形をおこなう。胎土は灰白色で焼成は不十分である。

38は白磁の碗である。口径23.9cm、残存高3.3cm。全面施釉で色調はオリーブ黄色に相当する。



図10 SD10 出土遺物 (S= 1 / 3)

口縁端部は若干肥厚し、三角形に突出する。

39 は須恵器の甕である。口縁部のみ遺存し、口径 19.2cm。端部は丸く肥厚し、強く外反している。胎土は灰色で雲母を少量ふくみ、焼成はやや軟質。40 は須恵器の大甕である。口縁端部だが遺存率が低く口径は不明。端部は断面方形になるよう分厚く作り出す。端部には内外面ともにススや炭化物が付着する。胎土は灰白色で少量の雲母をふくむ。41 は須恵器の甕である。口径 12.0cm、頸部径 9.6cm、残存高 3.9cm。頸部から口縁部にかけて外反し、口縁端部は三角形に肥厚する。焼成良好で外面は灰色、内面は赤灰色を呈する。42 は須恵器の高坏である。口径 15.0cm、残存高 3.5cm。口縁部はほぼ直立であり、端部から 2 cm ほどの位置に沈線をめぐらせる。胎土は灰色でわずかに雲母をふくむ。焼成良好。43 は須恵器の甕の底部である。内面は赤褐色、外面は灰褐色を呈する。接合しないが同一個体とみられる胴部片は内面に当て具痕がみとめられる。44 は須恵器の甕か。底部径 7.0cm、残存高 2.8cm を測る。底面は平底だが中央が若干隆起する。内面はナデ、外面はケズリで調整する。胎土は黒褐色で 1 mm 大の白色鉱物をふくみ、焼成は良好である。45 は須恵器の甕である。頸部から胴部まで遺存する。頸部径 3.6cm、胴部径 9.0cm、残存高 5.6cm。胴部最大径よりやや高い位置に穿孔を施し、その上部に棒状工具で凹線を描く。外面はヘラケズリ、内面はナデ調整をおこなう。胎土は黄灰色を呈し、器面には気泡が破裂したような小剥離が多数みられる。46 は土師器の高坏である。坏部下半から底部まで残り、括れ部で径 2.6cm、底部径 9.7cm、残存高 6.3cm。裾部外面をナデ調整しており、脚部外面に指頭圧痕がみられる。胎土はにぶい黄橙色で 2 ~ 3 mm 大の石英・長石をふくむ。外面には薄い赤彩がみられる。

47 ~ 52 は瓦である。47 は軒丸瓦である。最大長 12.2cm、最大幅 10.7cm、厚み 1.4cm。胎土は淡黄橙色で混和物はほとんどない。瓦当は指で中心に円を描き、外側は細刻線で 4 つに区画した内側

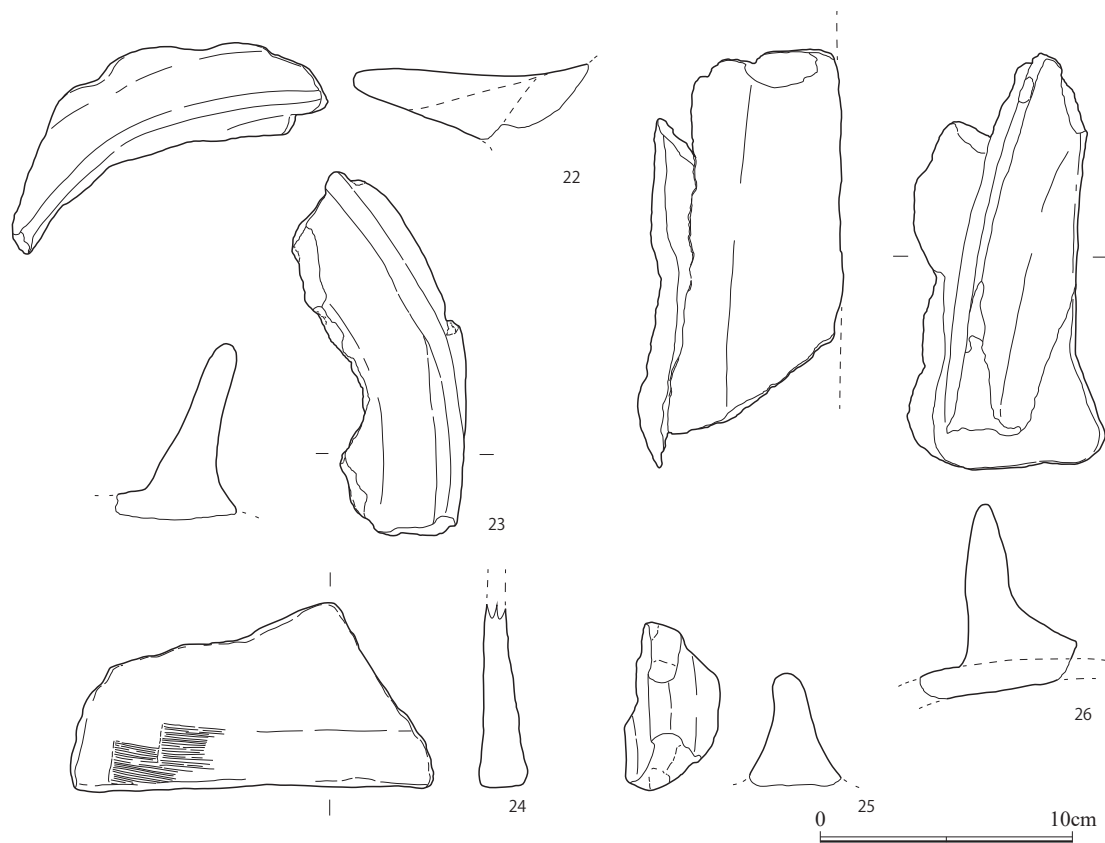


図 11 SD10 出土遺物 (S= 1 / 3)

にそれぞれ指で浅く2条を加えて蓮弁を表現する。48～51は平瓦である。残存長13.7cm、残存幅9.0cm、厚み2.4cm。胎土は淡橙色で比較的精良であり、1mm大の長石をふくむ。凹面には布目圧痕がみとめられる。49は残存長10.4cm、残存幅10.9cm、最大厚1.8cm。胎土は淡橙色で1mm大の長石をわずかにふくむ。両面ともに調整不明。50は残存長16.8cm、残存幅11.3cm、厚み1.8cm。胎土は赤橙色。凸面は叩き板で敲打調整をおこない、微小な段が平行に形成される。凹面には幅約3cmの板状模骨痕が残り、布目圧痕もみとめられる。51は残存長11.8cm、残存幅12.5cm、厚み2.1cm。胎土は淡橙色で比較的精良。凸面には線条叩き痕がみられるのに対して、凹面には製作痕跡はみとめ

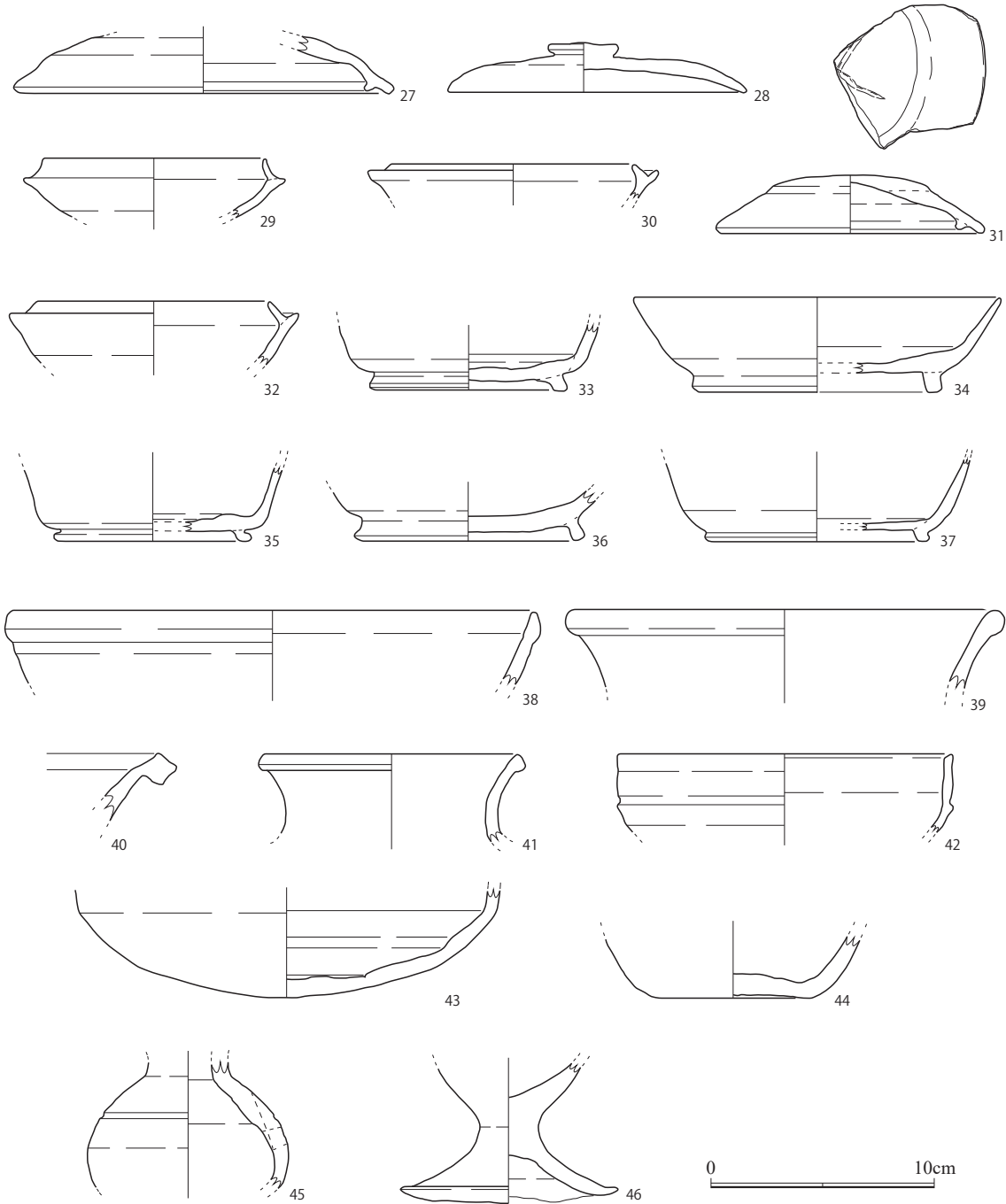


図12 SD10出土遺物 (S= 1 / 3)

られない。52は丸瓦である。残存長9.0cm、最大幅8.5cm、厚み2.1cm。胎土は赤橙色で2mm大の石英をふくむ。両面ともに磨耗のため調整は不明。

出土遺物から、SD10は8世紀初頭に埋没したと考えられる。

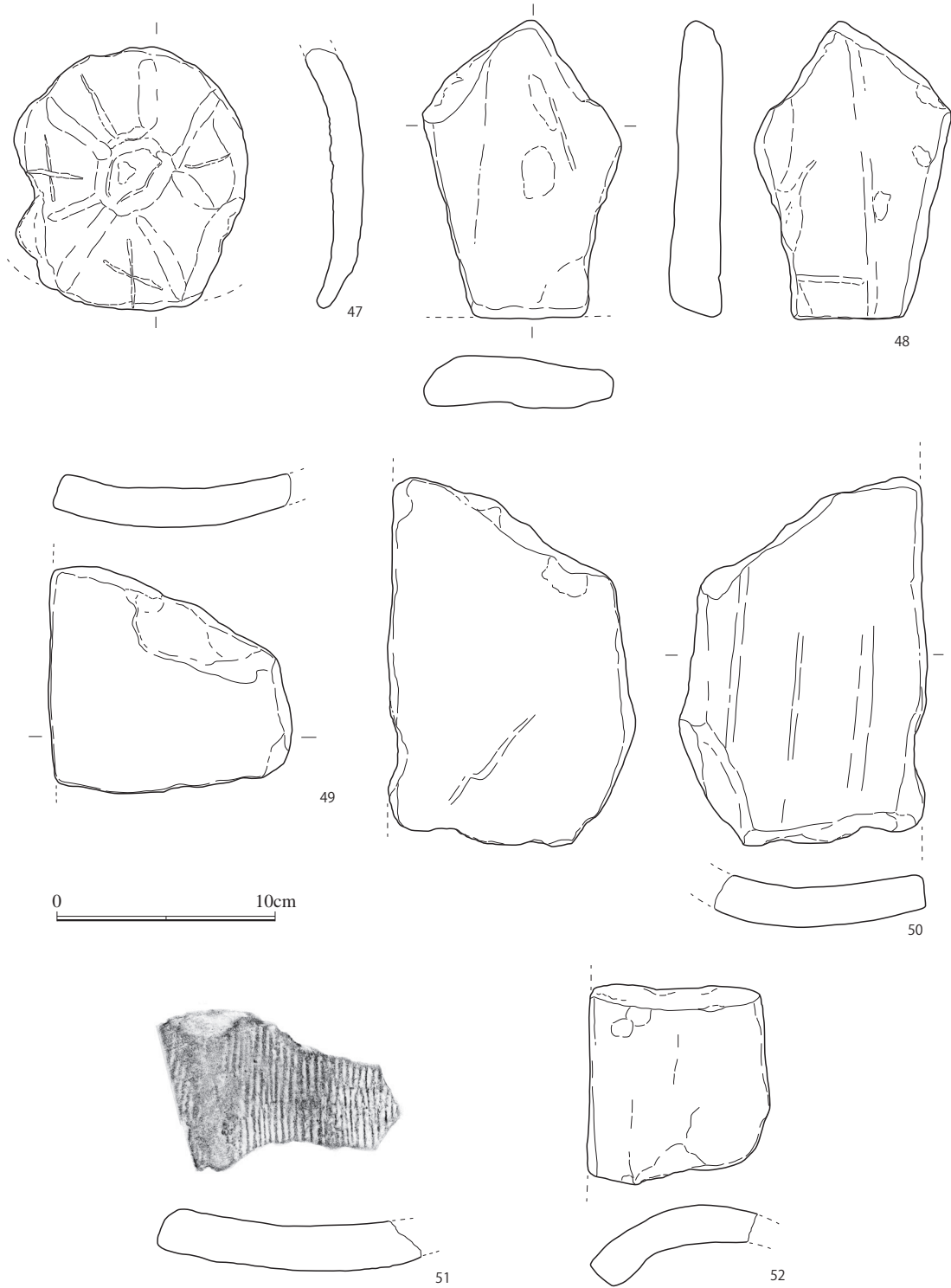


図13 SD10出土遺物 (S= 1 / 3)

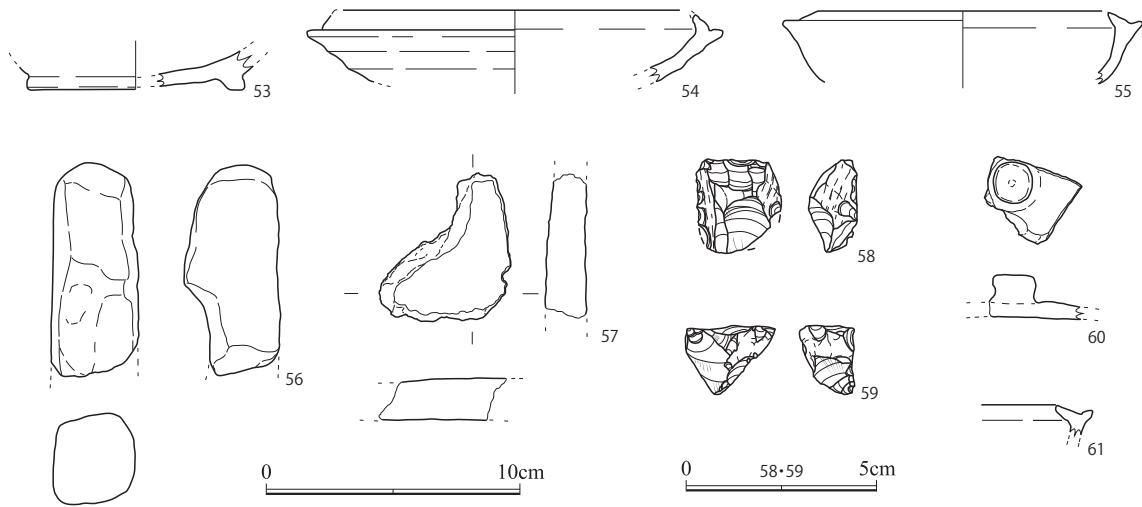


図 14 その他の流路出土遺物 (S= 1/2、1/3)

#### その他の溝

SD10 以外に 5 条の溝を検出しているが、いずれも深さは 10cm ほどで浅い。大雑把にみれば SD07・08・09 は東西方向、SD18・19 は南北方向にのびる。SD07 と SD08 はほぼ平行しており、いずれも SD10 より新しい。同様に SD18 と SD19 も平行で、どちらも SD07 より古い。これらの溝は遺物も少なく年代を推定する手掛かりに欠けるが、SD07・09 から白磁片が出土しており、両者は中世以降に掘削されたとみられる。

図 14 はこれらの溝から出土した遺物である。53～55 は須恵器の坏身である。53 は坏身の底部のみ遺存し、低い高台が外側へ向かって張り出す。54 は最大径 16.4cm でかえりが強く突出する。55 は最大径 14.1cm でかえりをつまみ出す。56 は柱状石刃の基部である。残存長 5.8cm、器幅 3.5cm、器厚 3.8cm。弓状の深い抉部を設ける。基部は丸みのある円基。砂質凝灰岩を用いる。107g。57 は板状の滑石製品。端部はいずれも欠損しており、残存長 5.7cm、最大厚 1.7cm。58・59 は黒曜石の剥片である。58 は最大長 2.5cm、重量 6.8 g。59 は最大長 2.3cm、重量 4.0 g。両者ともに全面に剥離が及ぶ。60 は須恵器の坏蓋である。つまみ付近のみ遺存する。61 は須恵器の坏身である。かえりが直線的にのびる。小片のため口径は不明。

#### 4. 土坑 (SK)

土坑は調査区南東で SK11 の 1 基を検出した。長軸 1.1m、短軸 0.8m、深さ 0.7m を測る。一部にステップ状の段をもつ。3 層のうち上層から少量の土師器が出土ただけで、中層以下では遺物をふくまない。遺物は小片であるため時期の特定は難しい。

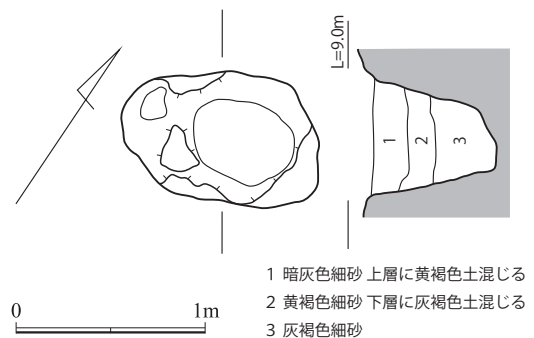


図 15 SK11 (S=1/40)

## 5. 落ち込み (SX)

調査区北側で落ち込み SX13 を検出した。南西側の肩部は  $N-60^{\circ}-W$  の方向にのびる。人力による掘削は困難と判断し、部分的にトレンチを入れて深さと時期を確認したうえで重機を用いて底面まで掘り下げた。底面までは 2.0m と深く、下部は八女粘土層に達する。斜面中腹に犬走り状の段を形成する。北東側の肩部を確認できず落ち込みとしたが、溝の可能性が考えられ、その場合には上場の幅は 5 m 以上となる。

類似する遺構として、北西に 100 m あまり離れた第 181 次調査で見つかった SD01 がある。SD01 は  $N-20^{\circ}-E$  の方向に掘削された直線的な溝で、46m にわたって確認されている。溝の底面は標高 7.0 ~ 7.2m で本調査区の SX13 と同程度であり、中段に犬走り状の平坦部を形成する点でも共通する。SD01 は近世から近代の遺物を包蔵しており、昭和初期の地図で道路に平行する水路が確認できることから、昭和初期に機能した溝である可能性が指摘されている。

SX13 は SD01 とおおむね直交する方向にのびるものの、昭和初期の地図や航空写真では対応する溝や地割を確認することができない。SD01 との関係性をふくめて、現時点では性格を推定しがたい。

出土遺物は土師器、須恵器、肥前系陶磁器などコンテナ半箱程度。62 は伊万里焼。口縁部の小片のみ遺存する。如意状の口縁部形態と復元径 22.0cm から盤と考えられる。63 は鉄滓である。最大長 4.7cm、重量 50 g。64 は青磁の花生である。残存長 4.3cm、厚み 0.7cm。頸部に一對で取り付く耳部とみられるが天地は不明である。色調から龍泉窯の製品の可能性がある。65 は白磁碗の底部である。低い高台がつき外面のみ施釉する。見込みに文様を陰刻するが、細片のため意匠は不明。底部径 8.7cm。

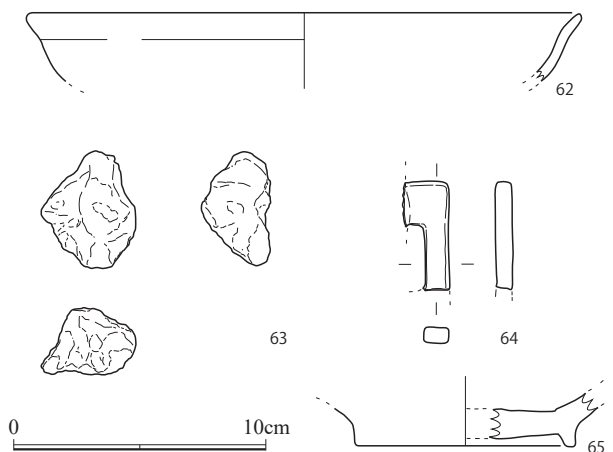


図 16 SX13 出土遺物 (S= 1 / 3)

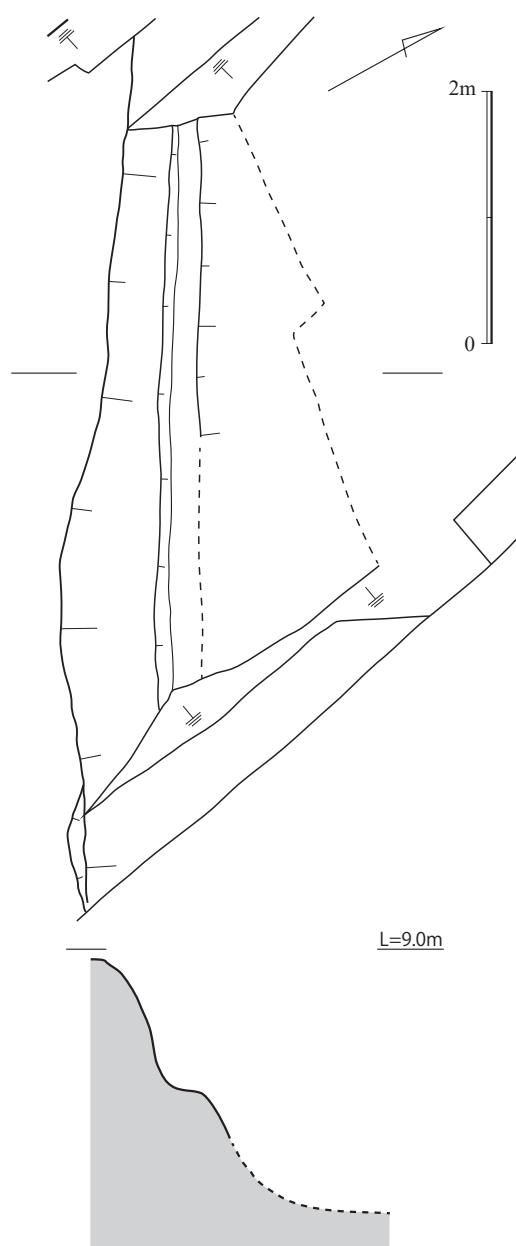


図 17 SX13 (S=1/60)

## 6. その他の出土遺物

66は備前焼のすり鉢である。口径27.2cmで口縁端部は玉縁状に肥厚する。内面に卸目を施す。SP13出土。67は土師器の甕である。底部径13.3cm。SP27出土。68は須恵器の甕である。口径16.8cm。SP03出土。69は須恵器の坏蓋である。口径18.2cm、残存高2.1cm。口縁部に返りをもつ。外面をヘラケズリ、内面をナデ成形する。検出時出土。70は土師器の甕の底部である。平底で底部径9.0cmを測る。SP12出土。71は土師器の皿である。底部径7.9cm。SP23出土。72は土師器の皿である。口径13.2cm、底部径10.1cm、器高1.4cm。SP21出土。73は砥石とみられる。残存長10.5cm、残存幅4.7cm、残存厚3.5cm。面のひとつの中央部に敲打にともなう凹みがみとめられる。石材は砂質凝灰岩で長辺方向に石目が走る。全体に器面は滑らか。SP28出土。74～78は検出時に出土。74は須恵器の坏蓋である。口縁部を欠損する。扁平なつまみを取り付く。外面はヘラケズリで成形する。75は白磁碗である。底部径7.3cm、残存高3.6cm。幅が広く低い高台をめぐらせる。内面全体に施釉しており、底部近くに沈線を1条施す。76は須恵器の無頸壺である。口径9.5cm、胴部径11.3cm、残存高4.7cm。器厚は約3～4mmで比較的薄い。胴部の張りが強く、頸部径は口縁部とほぼ変わらない。全面をナデ調整する。77は土師器の坏蓋である。口径11.6cm、残存高1.1cm。口縁部に突帯状の返りを貼り付ける。外面は丸みが弱く直線的である。78は須恵器の坏蓋である。中心部のみ遺存する。外面はヘラケズリ、内面は指ナデにより成形する。

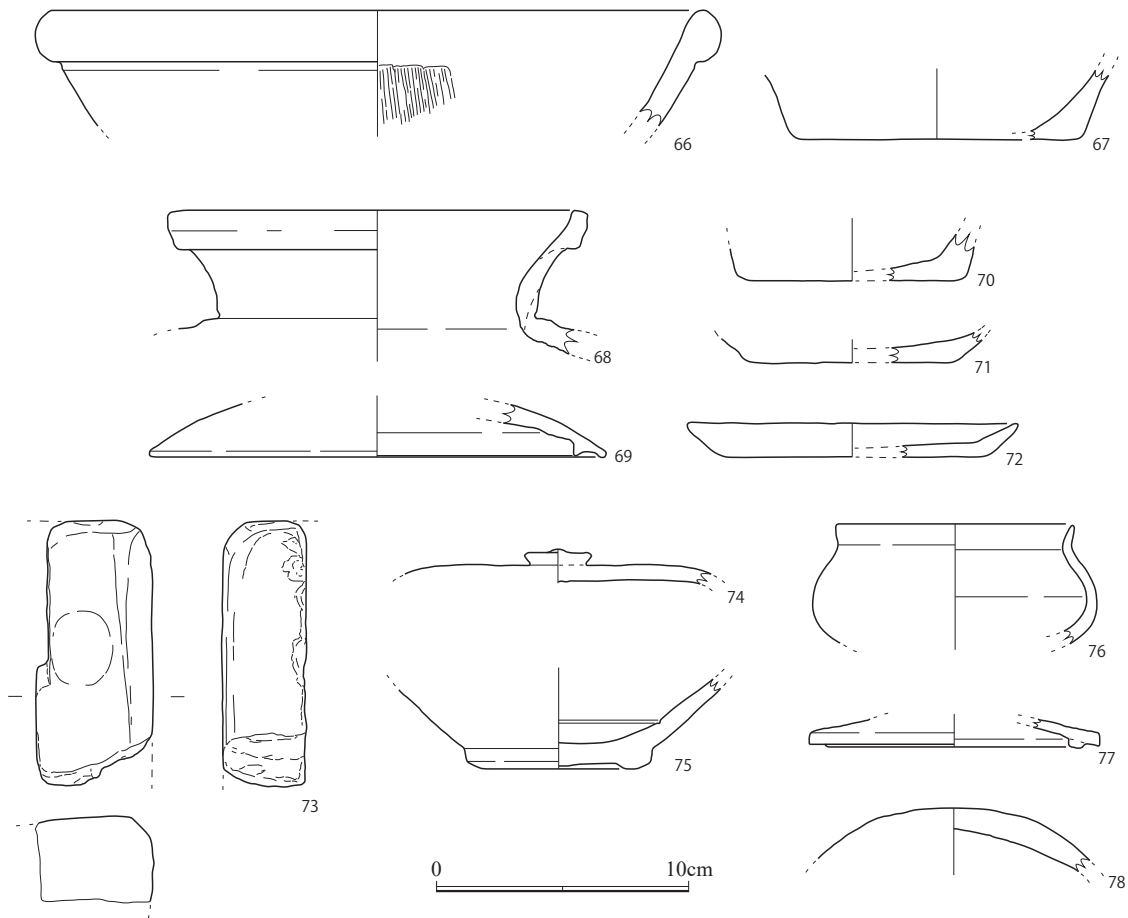


図18 その他の出土遺物 (S= 1 / 3)



### Ⅲ. まとめ

今回の調査では7世紀の竪穴建物跡や正方位に沿った7～8世紀の溝を確認し、南側の120次調査で想定された土地利用の様態を裏付ける結果となった。SD10は120次のSD-03から続く溝であり、確認した総延長は約14mとなった。深さは南北でほぼ同程度でありさらに北へ延びる可能性が高い一方、溝の北端で捉えた西側の立ち上がりから推定される上場の幅は約3mと120次よりも広く、屈折点に近いとも考えうる。軟質の初期瓦はこの北端付近に集中して埋没しており、近辺に瓦葺きの建物が存在した可能性がある。調査区内でSD10の年代に近いのはSC17であるが、やや先行する時期と想定され、同年代と確定できる遺構は確認していない。周辺調査では北東に40mほど離れた122次調査区において梁行3間、桁行7間以上の長舎建物が検出され、7世紀後半の遺物が出土している。主軸は10度東偏しており、SD10の方向と著しい乖離はみられない。建物の規模と構造から公的施設の一部とみられ、本調査区の区画溝との関連が注目される。

調査区周辺では、丘陵尾根を挟んだ西側で大規模区画や長舎建物が確認されている。23・114・185次では東西90m、南北115mの区画、56・59・117・179次でも東西70mの区画がそれぞれ明らかになっており、今回確認された区画とあわせて丘陵の東西に大規模施設群が展開した可能性が高い。6世紀後半に比恵遺跡群で展開するミヤケ関連遺構がやや散在するのに対して、那珂遺跡群の施設は集約性が高く、また方位の規範をより強く意識する傾向がみられる。古代における土地利用の実相を考えるうえで、本調査は重要な成果を提供するものであり、また今後の調査によるいっそうの理解が期待される。



1 調査区全景 西から



2 調査区全景 南から



1 SD10 東から



2 SD10 北から



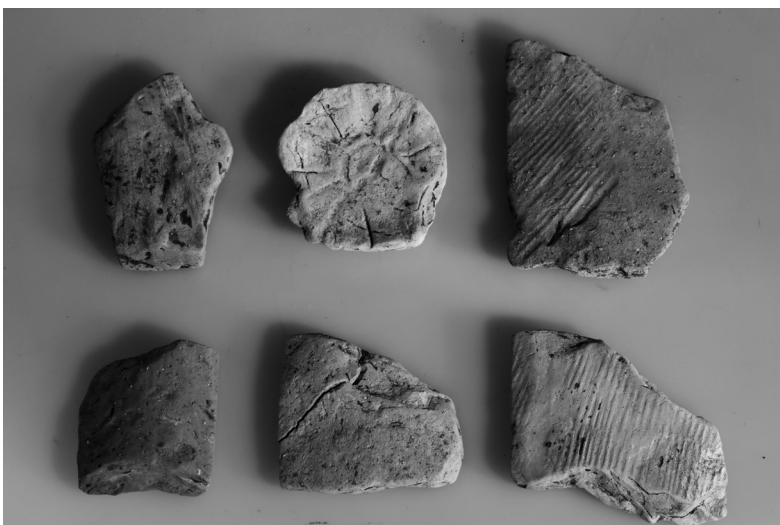
3 SD10 瓦出土状況 東から



1 SC17 西から



2 SX13 南から



3 SD10 出土瓦

## 報告書抄録

ふりがな	なか 92 ーなかいせきぐんだい190じちょうさほうこくー							
書名	那珂 92							
副書名	ー那珂遺跡群第190次調査報告ー							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1508集							
編著者名	鶴来航介							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神 1丁目 8番 1号							
発行年月日	2024年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
なかいせきぐん 那珂遺跡群	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 はかたくなか 博多区那珂	40132	0085	33° 34' 3"	130° 26' 19"	20220104 ～ 20220208	130.0	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
那珂遺跡群	集落	古代	竪穴建物、溝、落ち込み	土師器、瓦、須恵器、石製品、鉄製品	南隣の120次調査区から続く古代の南北溝			
要約	<p>那珂遺跡群は後期旧石器時代から中世にかけて遺構が形成される複合遺跡である。とくに古代には正方位の溝や大型建物が広範囲で見つかっており、北接する比恵遺跡群とあわせて地域の中心的な役割を果たしたことがうかがえる。</p> <p>本調査では、南隣の120次調査区で検出された7～8世紀の溝の延長部分を確認した。溝の方向は南北で正方位にほぼ合致しており、初期瓦を多数包蔵することから、公的施設を圍繞する区画溝の可能性がある。調査区内に同時期の遺構は確認できないが、竪穴建物は比較的時期が近く関係が注目される。その他、近世以降の落ち込みを周辺で検出した。</p>							

## 那珂 92

ー 那珂遺跡群第190次調査報告 ー

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1508集

2024（令和6）年3月22日発行

発行 福岡市教育委員会

〒810-8621 福岡市中央区天神 1丁目 8番 1号

印刷 株式会社 ソウヤマ印刷

〒812-0041 福岡市博多区吉塚 4丁目 3番 18号